

■ 特 集 ■

2019年度先端社会研究所第3回先端研セミナー講演録

題 目：オーバーツーリズムとジェントリフィケーション

講 師：中井 治郎 氏（龍谷大学）

松村 嘉久 氏（阪南大学）

日 時：2019年12月5日（木）16:50～18:30

場 所：関西学院大学上ヶ原キャンパス

司 会：笹部 建（関西学院大学）

グローバル化とモビリティ班研究補佐員

笹部 建

趣旨説明

2018年から開始された関西学院大学先端社会研究所の共同研究「グローバル化とモビリティ」班において、2019年度に企画された公開セミナーのタイトル「オーバーツーリズムとジェントリフィケーション」は、著者の関わっている大阪市内のまちづくりの仕事の延長線上から考えられたものだった。それ以前から同研究班では、観光社会学の領域でグローバル化・情報化された人々のコミュニケーションをどう考えるかというテーマを扱ってきた。東京五輪や大阪万博などの国際的イベントを控え、統合型リゾートや「観光立国」などのプロジェクトがセンセーショナルに扱われる中、社会学内部の理論的・経験的な「先端性」はどこに求められるのか。

そういった研究会の活動関心と同時に、筆者は大阪市内で行政から委託されたまちづくりの仕事に関わるようになり、元々全くの門外漢だった都市社会学・政治地理学等の研究などにも触れるようになっていた。こういった背景から、関西都市圏におけるジェントリフィケーション研究の最先端の動向と、今後の日本社会におけるインバウンド需要の未来を把握するための格好の検討事例とみなせるオーバーツーリズムの議論を重ね合わせ、都市変容とグローバル観光の問題を先述の公開セミナーのテーマとするに至った。京都に住みつつ海外からの観光客の増加に対する行政や住民の対応を調査されている中井治郎氏、長年大阪市 JR 新今宮駅前周辺のまちづくりを実践してこれら松村嘉久氏の両名から、当日はアクチュアルな論点をいくつも提示していただけた。まずは、本特集ではその模様を記録として掲載している。

しかし、2019年12月に公開セミナーが行われた直後、2020年初頭において、周知のように新型コロナウイルスによる未曾有のパンデミックが世界中を震撼させ、同年12月の本稿執筆時点でもその勢いは終わりを見せていない。京都からも大阪からも海外からの観光客の姿は激減し、政府は国内で観光経済を賄う必要に駆られ「Go to イート」「Go to トラベル」なるキャンペーンを展開し、感染拡大の歯止めがかからない状況下で調整・再検討を余儀なくされながらも、キャンペーンそのものは継続していく構えをとっている。

都市と観光の姿が一変した以上、ジェントリフィケーションやオーバーツーリズムの議論も、またグローバル化とモビリティの議論も別の角度から再度検討しなおしていく必要がある。講演録の

後に収録されている特集解題では、筆者がこれまでのグローバル化の社会理論とジェントリフィケーション・オーバーツーリズムの議論の関係性をまとめつつ、コロナ禍以降の都市と観光の問題を見通すための論点のいくつかが提示されている。

京都におけるオーバーツーリズムの現状

中 井 治 郎（龍谷大学）

1. 「オーバーツーリズム」とは何か



私は、もともと文化遺産を研究していました。京都の美山町にある 50 戸ほどの小さな茅葺屋根の集落や紀伊山地の熊野古道をフィールドとして、そこが文化遺産化されることによって、観光資源として力を持ち、たくさんの観光客を集める過程を研究していました。

オーバーツーリズムという言葉の難しいところは、我々の誰もが旅行者であり、旅行者を受入れる地域住民でもあるという二面性です。自分が観光地に行ったときには観光客になるし、自分の家の前に観光客が来るときには観光地の地域住民である。なかなか簡単に、自分は加害者だ、被害者だと割り切れない。例えば、僕自身は京都で観光客の混雑に巻き込まれながら暮らしているわけですが、一方でバックパッカー上りのフラッシュパッカーです。リュックサックを背負って貧乏旅行にしょっちゅう行っていたような人間が年を取って、小金を持つとフラッシュパッカーと言われるようになります。バックパッカースタイルなのに、二段ベッドの相部屋ではなく、ちゃんと個室に泊まるようになった奴らです。しかし、一方で京都という観光都市の住民であり、またこういう研究をしているからこそ、自分自身が観光客、旅行者として、地域にどういう迷惑をかけているか痛いほど分かっているという部分もあります。でも、やめられない。そこで加害性と被害性を行ったり来たりしながら、この問題に取り組んでいるというのが本音のところですよ。

オーバーツーリズムという言葉は今出させていただいた本（『パンクする京都』2019 年、星海社）の中で、「観光客の増加が、地域住民の暮らしや観光体験それ自体に受入れ難い悪影響を与えている状況」と定義したのですが、これは非常にやっかいな言葉です。諸説ありますが、もともと 2010 年代に入ったぐらいに、SNS のハッシュタグで広まり始めたと言われていています。メディアが

それを拾い上げるのが2016年前後。行政用語として出てきたわけでもないし、アカデミックな文脈の中で立ち上がってきた言葉でもない。観光客や地域住民の生活実感みたいなものの中、SNS上の「今日も観光客が多過ぎてかなわん」みたいな愚痴と一緒に自然発生的に出てきたパスワードなので、定義づけが難しい。どの範囲を指すのかが非常に曖昧なまま、多くの人に非常に便利だと飛びつかれた。2016年にメディアで一気に広がって、UNWTO（世界観光機関）が拾い上げるのが2018年。その2年間に一般語になった。

オーバーツーリズムという言葉の何がそんなに便利なのかというと、1つ目には、これまで個別に論じられていた過剰な観光化による悪影響を総合的に包括するからです。例えば民泊の問題、地下鉄やバスが混むという問題、ごみ捨ての問題、観光客によって起こされる個々を全部ひっくるめる言葉がこれまでなかった。日本の場合、オーバーツーリズムという言葉がはやる前から、観光公害という言葉が1960年代から使われ始め、一度死語になり最近また復活した。対して例えばヨーロッパでは、せっかく楽しみにしていた名勝に来たのに、観光客が多すぎてまともに風景を見られないことをツイートするときに、オーバーツーリズムというハッシュタグをつけるといった使われ方から始まりました。

2つ目には、これまで観光化が及ぼす害を考えると、自然や文化遺産、文化資源の破壊といったような文脈で語られることが多かったんですが、オーバーツーリズムには地域の生活に与える影響という視点が含まれるということです。

3つ目には、観光客が多過ぎて困るのは地域住民だけではなく、観光客自身も困るということです。これは、それまであまり大きく問題化されたことのない視点だった。観光客は観光地で写真を撮るときに何に一番気をつけるかというと、観光客が映り込まないようにする。実は、観光客は誰よりも観光客のことが嫌いです。「観光客が多過ぎて困る」というときには、実は地域住民だけではなくて、観光客の観光体験の質も問われています。満足度や利便性の面において観光客自身も害を被っていることが問題化されている。

4つ目が、受入れ難さという視点です。例えば同様の事象、同じようにバスが混んでいる、地下鉄が混んでいるといっても、これぐらい当たり前でしょうという地域の人がいれば、こんなに混んでいるなんて信じられないと怒り出す地域の人もある。東京から来ている人に話を聞くと、「京都の人は最近、地下鉄も混んでいるとおっしゃいますけど、僕は東京で20年いたので、それに比べると……」となる。東京では満員電車でぎゅうぎゅうでも誰も文句は言わなかったのに、京都では「この程度」で社会問題化してしまう——というわけです。乗車率が何%に……という話も、それについて何も問題化されない地域がある一方で、大変だと問題になる地域もあります。なので、一元的に乗車率が150%を超えたら、200%を超えたらオーバーツーリズムだという線引きができません。そのため学術的な議論に載せた際に、どうしても曖昧な言葉になってしまう。そういう意味で、ちょっと扱いづらいワードです。

2. オーバーツーリズムの何が問題なのか

具体的な話に入っていきます。

オーバーツーリズムがもたらす問題で、今回の発表では、観光客の観光体験の質は置いておい

て、地域社会に視点を合わせてやっていこうかなと思います。観光地とされた、観光地となった地域の人々に何が起こるか。

まず、生活における利便性の低下で、交通機関やトイレなど、各種インフラの麻痺。買い占めや、店舗の業態が住民向けではなく観光客向けに変わってしまうということです。観光産業は、ありていに言ってしまうと地域のインフラを切り売りするという側面がある。例えば地域のインフラとしてのバスが走っている中で、今まで住民しか利用していなかったのに観光客も乗るようになる。トイレもそれまでは地域の住民しか利用してなかった公衆トイレが、観光客も利用するようになる。それらの維持費は誰が払うのかという話になってくるわけです。インフラだけでなく文化もそうです。地域住民しか参加できなかったお祭りに、観光客も参加するといったことです。

買い占めも似たようなことで、地域の限られたお店の限られた商品を誰が買うのかという話になります。さらに、その店舗の業態が住民向けでなく観光客向けになってしまう。

また、よく言われるのがコミュニティの問題です。治安が悪化するとか、今日の「ジェントリフィケーション」というもう一つのテーマがありますけども、そことの関係でよく言われるのが、地価の高騰です。観光地化することによって、新しい産業が立ち上がり、地価が上がる。そうすると家賃、賃料が上がるわけです。それによって、もうこんな高い家賃のところには住んでいられないと言って、どんどん住民が流出していく。流出した空き家は賃料が高くなってしまい、住むだけではペイできないから商売に使う。例えば民泊であるとか、建て替えてお店にする。

さらに問題なのは、地域文化の毀損・改変で、観光資源としてさまざまな形で消費されることになります。たとえばある地域のお神楽が、祭りの日にだけやっていたものが、エンターテインメントとして観光客のために毎晩開催するようになるなど、観光資源化し、消費しやすい形に変えられていく。

オーバーツーリズムのオーバーという言葉が示すように、観光客の数が急激に増えているということもあります。世界的に海外旅行する、自分の国を出て他の国に旅行に行く人の数が、大体 20 年ぐらいの間に 2~3 倍近くになっています。そうすると世界的な観光地、パリやアムステルダムやバルセロナに、それまでには考えられないぐらいの数の人がやってくるようになります。このスピードは、国際観光機関の予想も超えて、すごく早く進んでいます。この背景には、それまで海外旅行をするような余裕もなかった国々（特に言われるのはアジア圏）が、中間層としてお金を持つようになってきて、海外旅行をするようになった。それまではごく一部の国の人しか海外旅行できなかったのに、海外旅行をするぐらい財力のある人の数がどんどん増え、また LCC の登場によりコストも下がった。

もう一つは見落とされやすいことですが、実はすごく問題ではないかなと思っていることがあります。日常の観光資源化ということです。たとえば寺社など有名な名所旧跡を観光バスで回るといようなこれまでの観光のスタイルから、まちなか観光・まち歩きなどが非常に人気を集めるようになっていく。旅先の地域の人々の暮らしぶりが感じられるところをゆっくり歩いて楽しみましようという観光スタイルが全世界的に広まっている。

これは何が消費されているかというと、リアルな人々の暮らしです。それまでは神社・仏閣、名所・旧跡みたいなものにカメラを向けてシャッターを切っていた観光客が、今度はまち歩き、まち

なか観光になり、普通に生活をしている地域住民に向けシャッターを切ることになるわけです。観光名所だけでなく地元の人の生活の感じられる場所に行ってみたくといった志向です。世界遺産になっているような立派な建物だけではなくて、市場に行って、普通のおじちゃん、おばちゃんがい物しているところを見てみたいと。リアルな人々の暮らしそのものが観光対象となっている状況がある。

先ほど話した、京都の美山町での聞き取りでなるほどと思ったのは、美山のかやぶきの里には五十戸ほどが小さな地域に密集して建っている集落があるのですが、そこにたくさんの人が来るわけです。茅葺屋根が残っているような村は、もともとプライバシーという意識がありませんので、高い塀なんか造らないですし、生垣も造らない。どこからどこまでが私有地で、どこからどこまでが公道かも一見しただけでは分からないことも多い。近所のおばちゃんも、玄関じゃなくて、縁側から勝手に入ってくるのが当たり前というような集落です。もともとそういうところだったわけです。そこにたくさんの観光客が来る状況になる。縁側から家の中が丸見えになります。普通に居間や縁側で御飯を食べていると、観光客がぞろぞろ来て、シャッターを押す。まるで人間動物園だと言う人もいました。自分たちの生活が見世物になっている感覚になる。

同じ観光地でも僕が他に研究している熊野古道などの場合は状況が少し違ってきます。熊野古道は山道ですので、たくさん観光客が来ると、山道の保全・補修に関しては問題が出てきますが、地域住民のプライバシーの問題やインフラを奪い合うという状況はそれほど起こりません。地域住民と観光客の動線が分かれているからです。しかし、世界的には地域住民の暮らしそのものが観光の目的になりつつあるという流れがあり、これがオーバーツーリズム問題化のひとつの原因としてあるわけです。そうすると、地域住民の中で Tourism phobia=観光客嫌い、あるいは観光嫌悪症と訳されますが、観光客は出ていけという運動が起こっていきます。一番過激で知られているのはバルセロナです。観光客が乗っている観光バスを覆面した男たちが止めて、ガラスを割ったり、パンクさせたりするようなことが起こったりしました。

3. 京都市におけるオーバーツーリズム

日本の場合、京都と鎌倉が有名な課題先進都市です。特に京都は日本のオーバーツーリズムの最前線と言われます。

最初は2014年前後から、「最近、祇園に外国人がいっぱい来てる」と話題になった。それまで祇園はお茶屋のまちで、お座敷のまちで、お金持ちが遊びに行くところ。観光客は多くなかった。そこにいわゆる「舞妓パパラッチ問題」——舞妓さん、芸妓さんに悪さをする外国人観光客がたくさん来ているらしいと囁かれ始める。ちょうどその頃から違法民泊が全国的に問題になり始めましたが、特に、民泊に関しては西高東低と言われ、関西のほうが民泊の数が非常に多い。2016年の参院選において京都では民泊問題が1つの争点になります。2017、18年ぐらいになりますと、京都の地価の高騰が全国でも報道されるようになります。全国商業地の地価上昇ランキングのトップテンのうち、半分以上が全部京都市内だった。何が起こったかというところ、それまで世界的にはほとんど注目を受けてなかったようなところが、いきなりインスタなどのSNSでバズることによって、みんなが押し寄せる観光地になってしまい、地価が高騰した。特に宿泊客の数はすごく増えたので、お

宿・ホテルが足りなくなり、民泊や簡易宿所、ホテルが増え、それによっても地価が高騰する。新しい観光スポットができたことと、ホテルが足りなかったことで、地価が高騰することによって、住人がどんどん流出していく。流出した後はお店や民泊になっていく。

2019 年には、京都仏教界が浄財の電子決済方式を認めない方針を発表しました。浄財というのは、いわゆる拝観料、お布施、お賽銭です。お寺の中でも絵はがきや、精進料理代はクレジットカードでも PayPay でもいい。しかし、お布施、おさい銭、拝観料、参拝料は、絶対電子決済してはいけなと。これらは同じお金でも信仰上の文脈では意味が違うということのようです。特に外国人観光客がお寺に押し寄せている現状について、彼らは彼らなりに、自分たちの宗教性の越えてはいけなラインを突破されかけているという危機感がある。突破されないための線引きというか、予防策として、京都仏教界は方針を発表したということです。

バスや定番スポットに関する問題も、よくテレビで報道されています。僕もメディアからたくさん呼んでもらえたのですが、バスの話をしてくれ、バスの話をしてくれと、どこのメディアからも言われる。ただ、バスは京都の行政が頑張って各種対策を実行してきているので実際マシになってきているんですよね。また住民が慣れてしまったということもあります。バスに乗れないでしょうと言われても、「いや、乗れますよ。3 台待ったら 4 台目には乗れるし」と京都市民は答えます。

一方で、外国人宿泊客数はすごい勢いで増えています。例えば、平成 22 年に 100 万あったかどうかが、去年には 450 万になります。『トラベル・アンド・レジャー』という雑誌では、7 年連続で京都が世界人気観光都市、憧れの行ってみたい観光都市のトップテンに入った。この 7 年間で、京都に来る外国人観光客数の増加時期と一致します。観光消費額も、うなぎ登りで伸びています。ただ、国内観光客も含めた全体で見たときの観光客数は、実は減っている。一番多かったのは 2015 年前後ぐらいで、そこからは横ばいか減少傾向です。

たしかに世界的に京都ブームが起こっている。しかし、日本人は京都離れしつつあるということです。世界的には、京都ブームが起こっているから外国人観光客はいっぱい来れるけれども、実際、日本人の観光客はどんどん減っている。もちろん日本人は最近お金がないので、日本の国内旅行の消費額もどんどん減っていますが、国内観光地のランキングの中でもどんどん京都の順位は下がっている。

そういうことなので、2014 年から京都でオーバーツーリズムが問題化されてきたと言いましたが、実は観光客の総数が増えたから京都のオーバーツーリズムが問題化しているわけではないということです。誰が来ているのか、何をしているのかが変わったから問題が起こるようになったということです。例えば、交通機関の混雑というような話も、日本人で今、京都に来ている人の 6 割以上は 10 回以上の人々です。彼らからすると、清水寺や金閣寺などの定番スポットは「もう何回も見たわ」となります。そうすると今度は行ったことのない場所へ行こうとなる。どんどんマニアックなお寺やスポットを勝手に探して、勝手に分散してくれたわけです。それが、今は一見さんの外国人観光客がどんどん増えているので、定番スポットの清水寺、金閣寺、銀閣寺みたいなものが、ずっと混み続けるわけです。また交通機関でも日本人が減り外国人観光客が増えるとひとりひとりが大荷物になりますし、不慣れなので乗り降りにも時間がかかってしまう。バスが余計に混み合うんですね。

そんなふうに京都観光の変化は、単に観光客の数が増えたということではなく、観光客の質が変わったからだといえます。内訳であるとか行動であるとか、どこに行きたいと思うかという志向であるとか、そういうものが変わったということが、実は大事だということです。

4. 舞妓パパラッチ問題

一番京都らしいということで、祇園で問題になっている舞妓パパラッチ問題を取り上げようと思います。

祇園で話を聞いていると「ここは、そもそも用のない人の来るとこやなかったんです」と言われるんです。用のない人という言い方がいいですね。非常に京都の方らしい言い方です。

つまり、祇園で用がある人は、例えば、お茶屋さん、お座敷で芸妓さん舞妓さんと呼んで遊ぶような人、もしくはお座敷のために働く人たちです。観光客や、ただ町並みを見物に来る人は「用のない人」というわけです。

彼らは、観光客のことを言うときには、「用のないのによう来はるね」という。町並みを見に来て、写真を撮りに来るのは、彼らからすると、このまちですべき用事ではないと思っていた。それが、2014年前後から外国人観光客が急増して、「ゴールデンルート」と言われる京都観光の定番ルートに組み込まれてしまう。

そこで発生するのが芸舞妓の被害です。被害を取りまとめている地元組織の方に話を聞くといろいろ出てきます。舞妓さんの襟にたばこを入れられたという話はセンセーショナルなのでメディアでもよく取り上げられますね。あと正式に警察に被害届を出されたものだと腕を引っ張られて、着物の袖が破れたという。こうなると被害額というのは、普通の成人式に行く大学生の女の子の着物を破る場合とは桁が違うわけです。私たちはそれを知っているので、舞妓さんが歩いていても、それに触るなんて恐れ多いと思ってしまうのですが、外国人観光客だとそれが分からない人たちもいるということですね。

他にも急に追いかけて怖くなったという話、つきまとわれるという話もある。急に肩を組んで写真を撮ろうとする、立ち止まったときにいろんなことをされるので、信号で立ち止まるのが怖いという話もありました。

もちろん被害を受けるのは芸舞妓だけではありません。建物への被害も多いです。とにかく触るし、座る。お茶屋さんの暖簾や竹矢来、戸などは、事情を知っている人間からすると、恐れ多いのですが、その恐れ多さがピンとこずに、映画村のセットとあまり変わらないように見える人もいます。例えば店先に背の低い石灯籠がある。これ座りやすいなと思って、よっこらしよと座ったときに、石がバラバラと崩れたというので、もう数十万円の被害だったりするわけです。

現場で話を聞いていると、中国人観光客は特にマナーが悪いと言われることがありますが、実際にはそんなに単純な話ではないのではないかと考えています。マナー違反というのも基本的には文化摩擦のひとつです。一口に外国人観光客といってもそれぞれ文化が違いますので、マナー違反の傾向も変わってくる。

たとえば通りでおむつを替えるなどの行為は、確かにアジア系の方が多いようです。僕も、祇園のお茶屋さんの玄関の前の軒下でおむつを替えているのを見て、「女将さんが出てきたら大変やで」

と冷や汗をかきました。しかしそういう「怖さ」は文化を共有しないとなかなか分からないことでもありますね。一方で同じマナー違反でも、祇園の場合は店先で座り込むなどは逆にアジア系の観光客は少ないように思われます。そのように外国人観光客のマナー違反といっても、実際にはもう少し細分化して考えなくてはいけない問題だと思います。

しかし、何より地域にとって不幸であったのは、祇園自身がべつに観光地になりたかったわけではないということです。他の観光地は、観光客に来てほしいけどマナーも守ってほしいということだと思いますが、祇園は、そもそも観光客に来てほしくないということですね。外国人観光客が迷惑行為をしている、マナー違反をしているという、マナーを正してほしい、マナーを守ってほしいと思いがちだし、報道もそういう文脈でされることが多いのですが、実際地元の人が考えていることは、マナーを守ってしようが、どれだけ優等生であろうが、彼らは「用のない人」、観光客がいるだけで、まちの価値が下がるということを危惧しています。

生々しい話になりますが、祇園のお茶屋さんで出す料理と大阪の新地の日本料理屋さんで出す料理とは、実際にそんなに差はないというんですね。「そんなに差はないんやけど、うちのほうが5,000 円〜1 万円高い。何でやと思う？」と。それは、要するにまちの風情や雰囲気も含めた場所代として取っているお金であると。これが、観光客でゴった返すまちになってしまったときには、大阪の新地と同じ料金しか取れなくなってしまう。観光客がいること自体が、そのまちの価値を毀損してしまう。いわゆる祇園ブランドの毀損ということだと思います。

「それだけ観光客が来ているのであれば、もっと観光客向けのお店をやればいいのに」とか、「観光客にもっとお座敷を開いていけばいいのに」という意見もありますが、問題は観光客は究極の一見さんであるということなんです。

たとえば祇園のあるお座敷でお話を聞かせてもらったときに「やはり観光客を相手に商売するのは難しいですか？」と言ってみたら、「先生の後ろにあるついたて、いつの物か知っています？」と言われました「先生の右手にある壺、いつのものか分かります？」とも。

つまり、ここでお酒を飲んで、踊ったり、遊んだりしてもらった際に事故が起こった場合、被害の度合いが普通の飲食店とは桁違いになるわけです。そこでどこの誰とも分からない人、身元がはっきりしていない人に、果たしてお酒を飲ませられるかどうか、という話になる。

それでも観光客向けに、例えばお店の業態をカスタマイズする場合もあるかもしれない。しかしそうなると、結局は今ある花街文化のようなものは大きく形を変えることになるでしょう。舞妓さんが数百万円の着物を着て接待するなんてこともできなくなり、手の届くところに数百年前の壺が置いてあるような部屋で飲むこともできなくなるかもしれません。たしかに京都は350 年前から観光都市ではあります。しかし、祇園は京都を代表する地域と言われながらも、観光と相性がいいとはいえないんですね。

ただ、祇園が祇園として今までのままでやっていけるかという、これもまた難しいのは事実です。昔から祇園の文化を支えていた旦那衆みたいなものの力は弱くなっていますし、接待を経費で落とせなくなったのが一番大きいといえますね。実は観光客よりもこのことが祇園にとって一番ダメージが大きかったという話をされていました。

観光客がいっぱい来ているなら、それをどういうふうに、祇園のまちのブランドを傷つけずにお

金を落としてももらえるようにするか。たしかに今までどおりのやり方では立ちいかなくなりつつあるが、一方で守らなくてはいけないものもあるので難しいところだと思います。高級なお宿ならまだしも、民泊を建てるというような話が出ると、地域ぐるみで説得してあきらめてもらうという言い方をされていました。今年（2019年）の10月25日からマナー啓発看板などが私道撮影禁止の看板に変わりました。結局、マナーを守ってほしいのではなく、何を禁止したら観光客が一番嫌がるだろうかと考えた結果だと聞きます。要するにできるだけ観光客に来てほしくないということですね。

これは、世界で一番売れているガイドブックと言われている『ロンリープラネット』の京都版です。毎年、表紙は舞妓さんの写真になるようです。非常にフォトジェニックで京都のシンボルになっています。京都に来たからには舞妓の写真を撮って帰りたいという強い執着が生まれ、それがたくさんさんのトラブルになる。それならば写真を撮れなくしたらいいのではないかと地域の人々が考えた結果として、私道撮影禁止の看板が設置されたということです。舞妓の写真を撮るためにかなり強引なことをするので、「観光客は、舞妓をミッキーマウスのようなものやと思ってはる」みたいなことを言われたりします。

5. 観光のまなざしの現在形

京都は350年前から観光都市で、観光客や東京人が京都に何を求めているかを、先んじて実現してきた。それによって、いわゆる観光的に魅力的なまちであり続けたという経緯がある。

例えば京都タワー。何であんな物が京都の玄関口にあるんだろう。京都タワーができたときは、「東寺の塔より高い建物を京都に建てるとは何事や」という反対運動があったらしい。当時、京都らしさも、最初から現在の我々が思っている古都のイメージで固まっていたわけではなく、様々な要素を含んでいたものが、どんどん捨象されていく中で現在の「京都らしさ」ができ上がってきた。それは観光のまなざしです。外から京都を見ている観光客が京都に何を求めているかを、もはや都不是なくなった京都自身が生き残りのために率先して酌み取ってきた歴史もあります。

さらに近年になると非常におもしろい分析もあります。京都を描く映画から、京都人の内面が捨象されているという指摘です。つまり、昔、京都の人々を描く映画では、京都におけるある種の因習や窮屈な伝統みたいなものと葛藤しながら生きているといったことがテーマになっていたり、そのことが描写されていることが多かった。ところが近年、特に2000年代以降、京都が描かれるときは、京都人はディズニーランドのミッキーマウスと同じような描かれ方をする。風変わりな不思議の国に住んでいて、主人公を迎え入れるキャラクターみたいに描かれてしまう。彼らの内面の描写がほとんどないというのですね。

これは、最近の舞妓さんを消費するまなざし、「かわいい」という視点から舞妓さん、芸妓さんを消費するような視点とも重なります。上の世代からすると、舞妓さん、芸妓さんは確かにかわいいんだけど、ある種の恐れ多さや、彼女たちの苦勞・葛藤など、いろんなもの包み込んで見ていく中での付き合い方や文化消費の仕方があったのですが、最近、本当にかわいいだけのものであり、かわいいもの以外の要素に関わらない消費の仕方をされる。

11月、フジテレビの朝の番組で、東京オリンピックで外国人観光客が来て、ごみ捨て問題がた

くさん出てくるだろうから、どうすればごみ捨て問題が解決できるだろうかという話題の際に出てきた案がこれです。

「舞妓にゴミ箱を背負わせ、ごみを捨てなくなったら、アプリで舞妓を呼び出す」。歩くゴミ箱にするという案です。こうなってくると、まさにキャラクターとして消費される、それこそディズニーランドにいる着ぐるみのバイトさんたちみたいな、それぐらいの感覚の扱いになるわけです。

これは個人的な反省になるのですが、ちょうど先々週、僕も東京の番組に出て話をした際、コスプレ舞妓の話が出ました。最近、完璧にお化粧まで全部コスプレをして、祇園を歩いて観光客との撮影に応じるコスプレ舞妓がたまに出没すると。我々から見たら、「舞妓さんやったら、あんなに暇そうにゆっくり歩いていることはないから、あれはコスプレ舞妓や」ということが分かる。しかし外国人観光客からすると分からないのか、分かっているけど別に気にしないのか分かりませんが、一緒に写真を撮って「京都で舞妓と写真を撮ったよ！」と SNS などにアップしてしまう。そんなことを説明しながら、一応、僕はそれは問題ですよというつもりでその話題を提供したんですけども、スタジオとしては「え、その何が問題なんですか？」という空気になってしまいました。

コスプレ舞妓が外国人観光客に写真を撮られたり、一緒に記念撮影をしたりして、その写真が世界に拡散されるといった状況が、花街文化であるとか、本当の舞妓さんにとってよくないことであるという感覚がうまく伝えられなかったんです。多分、京都に対する近さ／遠さといった問題もあるでしょうし、それは別に外国人だけじゃなくて、日本人からしてもそういう感覚が当たり前になりつつあるということなんですよ。

2015 年に、45 年ぶりに日本は、外国旅行する人よりも日本旅行に来る外国人の数が上回ったということで、観光する国から観光される国になったと僕は言っています。その中で、人々のリアルな暮らしがどんどん観光対象になってきている。建物とか景観とかではなくて、暮らしている人。エキゾチックな暮らし方をしている日本人、つまり舞妓がまさに典型的な例でないかと思います。

最近、SNS でよく出てくるのが、日本を旅行する外国人観光客が路上で酔い潰れているサラリーマンと一緒に記念撮影する投稿ですね。大体、片手にストロングゼロを持っていたりするわけですが。アルコールツーリズムみたいなもので、日本が飲酒に対し非常に寛容な社会であることが大分知れ渡ってきまして、日本旅行をするのであれば路上で飲もうぜとなるし、酔い潰れて寝ているサラリーマンを見て、写真を撮る。新たな日本名物になっているわけです。

まさに、観光は都市がテーマパーク化されることでもあるのですが、そうするとそこに住んでいる人々が、ミッキーマウス化してくるわけです。

あと 1 つ、京都はこのまま行くと、どうなるか。「観光客数を減らしました」と誇るのは京都市だけです。普通は、観光客数をこれだけ増やしましたと自慢するのですが、京都市の行政としては観光客数をこんなに抑えたということが手柄になるんですね。

要するに、観光客数を抑える代わりに、質の向上と彼らは言いますが、一人当たりの観光消費額を上げていくほうにやっこしている。

ようやくお宿バブルも終わりつつありまして、宿が足りてきた。宿が飽和してきたこともあって、地域との調和を重視しない宿の新規開業「お断り」宣言を、この間、11 月に門川市長が発表しました。一方で上質宿泊施設誘致制度という、今までは宿泊ホテルを建ててはいけなかった地域

に、高級ホテルならオーケーという制度もあります。ただし、これについては地元住民から反対運動が起こっているケースもあります。

いずれにせよ、単に観光客の数を増やす・減らすというだけでなく、京都の消費、観光のされ方みたいなものを、今後どうやってコントロールしていくのが、1つのテーマとなってきているのかなと思います。

新今宮でジェントリフィケーションは発生しているのか

松 村 嘉 久 (阪南大学)

1. 「～イズム」や「○○ゼーション」の前に

大阪新今宮のあいりん地区でジェントリフィケーションが発生しているのか、という話をします。実のところ、私はジェントリフィケーションには興味ありません。まちが正しい方向に行くかどうかに興味があって、それがジェントリフィケーションと言われようが、何と呼ばれようが、私は関係ないと思っています。

新今宮は課題の最先端地域です。私は基本的に、間違いなくこれからの日本では、劇的な空間的リストラクチャリングが発生すると予想しています。今、日本の人口は1億2,700万、18歳の人はいきなり生まれてこないで人口推計は簡単です。18年前に生まれてきた人が18歳になるので、社会的な増加がない限り、要は18歳の外国人が日本へ移住して来ない限り、18歳人口はいきなり増えません。厚生労働省の人口推計によると、今後25年間で2,000万人近く人口が減ります。現在の四国と九州の人口を足してざっと2,000万人です。現実問題、2,000万人も人口が減り、高齢者が多くなったときのことを考えて、観光立国を論じないと駄目です。

観光に関しても、地域によって課題は全く異なります。京都市の場合は観光客が来過ぎて困っています。逆に全く来なくて困っているところもあって、来過ぎて困っているところよりも断然多いと思います。都市計画とか景観計画ならあるけど、まともな観光計画があるところは少ないのが現状です。今、着地で対応できる観光産業は極めて未熟です。なぜかという、2015年頃から突然訪日外国人が増えて、あっという間にインバウンド時代が到来したからです。日本人に海外旅行を売って成長してきた大手旅行代理店も、訪日外国人への着地対応が全くできていません。そこで今、いろんな意味でインバウンド観光をめぐるトラブルが起きているわけです。例えば、京都の祇園で起こっている問題って、基本は観光客のマナーの問題です。一見さんお断りなら、まちのみんなで合意できたら、ゲーティッドストリートにして、入り口で入場料をとるという方法もある、と私は思います。

地域の生活インフラを住民と観光客が一緒に使うことで問題が生じていることもあります。でも逆に、地域の生活インフラを地域の力だけで維持できないところ国内には多く、今後ますます増えていくことでしょう。JR 四国、JR 北海道などを維持しようと思ったら、観光客と共有しなかったらできないわけです。京都市内のバスのように、住民の足に観光客が加わって混雑して困る、と

というような場合は、地域住民のサービスと切り分けて、観光客向けに観光産業化して、名所だけを回るルートを作ったらいんです。住民のニーズと観光客のニーズは違うのでお互いがある意味不幸な話。観光産業化して儲けて、その儲けを地域住民へのサービスに使ったらい。人口も観光客も少ないところではインフラを共有して維持しなければしょうがない。逆に、観光客が多すぎて競合するのであれば、住民サービスと切り分ければいい、というのが私の意見です。

オーバーツーリズムの話は、総論としてやるよりも各論でやった方がいいと思います。なぜかという、自分の居住空間へ外国人が入ってきたら、人数の問題でなく1人でもアウト。来てほしくないところへ来たら、1人でもアウト。電車とかテーマパークなら、想定定員の3倍でも4倍でも基本は歓迎するはず。オーバーツーリズムの問題は地域や立場によって、捉え方が違うはずです。

オーバーツーリズムもジェントリフィケーションも、ある意味で価値観が埋め込まれていて、オーバーツーリズムはあかん、ジェントリフィケーションもあかん、と批判のための安易なレッテル貼りになっているところがあります。誰かがこんなことされたとか、あんなことされたとか、週刊誌の記事みたいな話が多くて、それでレッテル貼りしたら批判ばかり。私はもっと、具体的に何が起きているのかを見て、具体的な解決策を探って示さないとあかんと考えています。

都市空間のテーマパーク化については、20年ほど前に論文で書きましたが、観光客のまなざしと資本の論理のもとでは避けられないと思います。鶴橋は焼き肉、新世界は串カツ、という地域のイメージが固定化して、観光客もそれを求めて来ている。新世界でうどん屋をしても、みんな串カツを食べに来ているから、なかなか商売が成り立たない。

日本全体で観光立国を実現しようとしたら、大阪がオーバーツーリズム状態になるのは覚悟しておく必要があります。大阪は国際観光のゲートウェイなので当然です。政府計画通り年間6,000万人もの訪日外国人が来ても、1日当たりにしたら20万人、日本に7日間滞在するとしても1日140万人。将来2,000万人もの人口が減るなかで、140万人くらいの訪日外国人が滞在していても、日本全国に散らばっていれば大きな問題にはなりません。

ジェントリフィケーションは、4つの段階に分けられます。第1段階は困窮地域やインナーシティへ「よりよい人」が入ってきます。第2段階では地域社会や住民の構成が再編成されます。続く第3段階でいろんな投資が入って地価や家賃が上昇します。そして最後の第4段階として住民が立ち退きなんかで住居を失い、地域コミュニティが失われます。結局、ジェントリフィケーションの発生が批判の対象となり、レッテル貼りとなるのはこの最後の段階です。不本意に追い出される人たちがいる、そんな開発は許されない、というのが最も重要なところだと思います。

2. 大阪新今宮周辺の背景と現状

新今宮の南側、西成区あいりん地区で、私はSHINGO★西成というラッパーと組んで、西成WAN（Wall Art Nippon）という活動をしています。まちの子どもたちと一緒に落書きを消して壁画を描いて、まちを明るくしよう、まちをキレイにしよう、という活動です。地域の大半の人は最初から応援してくれましたが、「ジェントリフィケーションを誘発しようとしている」などと批判する人もいました。ところが、あいりん総合センターの建替え工事にともなって、私たちが描いた壁画が壊されることになると、批判してきた人たちのなかから「みんなで描いた壁画をまもろう」



という声があがり、私たちは戸惑いました。ものごとを左右で考える人は、「左、左、左」と言いながら反転して、気が付けば右を左といって指していることがあります。向いている方向、軸がブレるんです。私は地理学を学んだので、左右ではなく、東西でものを考えるようにしています。いつもブレない軸を持つと思っています。

では、まちづくりでブレない軸って何か。例えば、「汚いよりキレイほうがいい」これってブレますか？ あいりん地区では「汚いほうがいい」と言う人もいます。キレイにする時、野宿している人が排除されるし、その後も、野宿している人が居づらくなるからというのが理由です。「危険よりも安全なほうがいい」これも当たり前だと思いませんか？ あいりん地区では、「ちょっとは危険と怖がられているほうがいい」と言う人もいます。まちづくりを志す人間からすると、この二つがブレると非常にづらいところです。

あいりん地区はいくつの変容を経て今に至っています。1つ目の変容は60年代から80年代にかけて、スラムから日雇い労働者のまちへ変容しました。もともと地域の住民が住む木造バラックの密集地域に、簡易宿所ができて、商店街ができました。この頃は希望のスラムです。日本のあちらこちらから、あいりん地区に来て、そこで働いてお金を貯め、その周辺や郊外で住まいを探す。あいりん地区でとりあえず仕事をして、お金が貯まれば周辺に住んでいく。ある意味で、西成のあいりん地区が都市成長のエンジンの役割を果たしていた頃で、労働者が激しく新陳代謝するなかで周辺へ定住する人も増えていった時代です。

その後、1990年代から2000年代にかけて、日雇い労働者のまちから野宿とホームレスのまちになりました。日雇い労働者が高齢化して働けなくなり、バブルの崩壊でいきなり野宿やホームレスが増えました。日雇い労働者って、バブルの頃は金持ちでした。日給2万円近く稼いでいたので、あいりん地区やその周辺での消費は旺盛でした。その後、野宿とホームレスのまちから生活保護のまちになりました。この頃から絶望のスラムへ変わり始めます。あいりん地区の労働者が野宿を余儀なくされる、そのなかから生活保護にかけやすい高齢者から、どんどん畳の上にあがってもらいました。簡易宿所の多くが生活保護向けの福祉マンションへと転用されて、その福祉マンションへ

他所から生活保護が流入するようにもなりました。全国から生活保護ありきであいりん地区へ人が集まりました。

外国人を受入れ始めたのは 2005 年頃からで、あいりん地区では「観光立国」が 15 年前にすでに注目されていました。2005 年から 2007 年ぐらいは、日本に来るバックパッカーのほぼ全員があいりん地区に泊まるような状況だったんです。地域のイメージも良くなってきたので、2007 年頃からは、国内の日本人旅行者もあいりん地区に泊まるようになりました。その後、日本全体でインバウンドの時代が到来するわけですが、本格的な到来はインバウンドがアウトバウンドを超えた 2015 年です。あいりん地区でもこの前後から、いろんなものが動き出しました。不動産市場も動いたし、民泊も激増しました。

2015 年以前は、あいりん地区の不動産は動かないもの、文字通り不動だと思っていました。不動産で唯一、2010 年頃からちょこちょこ動き始めたのが、商店街の空き店舗にできた中国人が経営するカラオケ居酒屋でした。シャッターの閉まっている空き店舗が商店街にたくさんあって、そこを中国人不動産屋が買って改装して、おもに生活保護を相手にするカラオケ居酒屋を開業する、というビジネスモデルができたので、数年のうちに 80 軒くらいに増えました。インバウンド時代が到来した 2015 年前後から急に増えたのが民泊。2018 年に住宅宿泊事業法が施行されるまでは、ほぼ全部が違法民泊でした。

あいりん地区の変容で注目して欲しいのは、人口構成の変容です。まちに新しい人たちが入り込んで来ても、古くからいた人がいなくなったわけではありません。日雇い労働者もいるし、野宿している人もいるし、生活保護もいて地域の住民もいる。そこに外国人の旅行者も来て、日本人の旅行者もやって来て、あいりん地区のなかで併存しているわけです。人口構成が変わっただけで、古くからの人も新しい人も併存している。ただし重要なのは、全体の人口規模は減った、ということです。

ジェントリフィケーションという場合、古くから住んでいる人がいっぱいいて、それを押しのけて新しい人たちが入ってくるわけです。あいりん地区の場合、最盛期は 2 万 5,000 人くらいの労働者がいましたが、現在は 4,000 人くらいで、2 万近く労働者が減りました。労働者の住居だった簡易宿所も最盛期の約 200 軒から 60 軒くらいに減り、80 軒あまりは福祉マンションへ転業して、残りの 60 軒あまりは廃業しました。あいりん地区全体の人口規模は、明らかに減っていて、生活保護のまちへと変容した 2000 年頃、まさに瀕死状態でした。西成特区構想が始まるきっかけとなった人口推計では、あいりん地区では 2030 年には人口が激減して「0」に近づく、という驚きの結果がでました。单身男性高齢者が多く、子どもや若者が少ないからです。

ジェントリフィケーションという言葉で説明しようとする、古くから住んでいる人らを追い出して、新しく再開発するという話になるかと思いますが、あいりん地区の簡易宿所はガラガラ、労働者で賑わった商店街も空き店舗だらけ。JR 新今宮駅北側にある星野リゾートの建設予定地も長い間ずっと空き地のまま放置されていたところです。

3. 「追い出された」のは誰なのか

あいりん地区ではあいりん労働センターの建替えでいろんなことが進んでいます。あいりん労働

センターの建物の上には市営住宅がありましたが、すぐ近くに新しい市営住宅を建てて住民も移住しました。センター回りで野宿していた人たちには、支援団体や行政が丁寧にアウトリーチをかけて、生活保護に移行する人もいて、随分と減りました。

今課題になっているのは、それでも野宿している人がいるので、センターが新設されるまでの間、その人たちの居場所を地域のなかでどう確保するのかということです。あいりん地区のなかには昔、違法な賭場がいっぱいあって、そこが野宿者や半野宿者、生活保護のある意味居場所にもなっていました。西成特区構想の一環でそうした違法な賭場は見事に一掃され、居場所はなくなりました。まちづくりのブレない方針として、違法な賭場でも居場所になっているから残せ、とは絶対になりません。

星野リゾート予定地も長年空き地になっていたところで、外国人の就労仲介をする YOLO BASE という新しい施設も、馬淵生活館という建物が廃墟になって残っていたところでした。どちらも現役で何か利用されていたわけではなく、すでに役割を終えて放置されていたところでした。

今、西成で問題になっているのは、居住空間で急増する特区民泊、新法民泊、違法民泊です。2018年の台風で、あいりん地区の木造老朽住宅の屋根が飛ばされ、被害は広い範囲に広がりました。その直後まちを歩いていると、屋根を飛ばされた家屋を中国系の不動産屋が見回る姿をよく見かけました。今ではそうした家屋の多くが売られて、改装されて、中国系の民泊として営業されています。あいりん地区内にはややこしい事務所もいくつかありますが、中国人の不動産屋や旅行者は隣がそうした事務所でも全然気にしません。日本人なら尻込みするような物件でも平気で買って、民泊にして、中国人の旅行者が入ってきています。商店街の空き店舗も、もともと空いていたところに、中国人のカラオケ居酒屋や民泊が入ってきています。これも「誰かを追い出して」ということではありません。

外国人旅行者の受入れも、別に日雇い労働者を簡易宿所から追い出してやったわけではありません。2005年頃の簡易宿所はどこもガラガラで空室ばかり。空いている部屋をうめたいが、労働者も日本人も泊まりに来ない。誰なら泊まりに来てくれるのかと考えた時、当時は外国人のバックパッカーくらいしかいなかったんです。そこで外国人を積極的に受入れるようになるのですが、その際に若干問題になったのが、労働者と外国人旅行者の生活サイクルの違いでした。外国人の受入れが始まった頃の簡易宿所には労働者と外国人が併存する状態でした。労働者は朝早くセンターへ求職しに行くため、早朝3時、4時に起きて動き出します。外国人旅行者はたいてい夜10時から騒ぎ始めるので、同じ簡易宿所内で併存していると何かと騒音などのトラブルが起こりやすくなります。そこで、複数の簡易宿所を経営されている方々が、労働者を泊める物件と、外国人旅行者を泊める物件に分けて、宿泊客を誘導するようになりました。ほぼ全ての簡易宿所がガラガラだったので、あいりん地区のなかで、労働者の多いところ、外国人旅行者の多いところ、両者が併存するところへとうまくすみわけができました。

生活保護もあいりん地区のなかに福祉マンションのストックがいっぱいあるので、ある福祉マンションに何かの事情で住めなくなっても、たいていは近隣の違う福祉マンションへ移っていきます。簡易宿所も福祉マンションもストックが豊富で選択肢も多いので、労働者も生活保護も、決して追い出されることはなく、あいりん地区のなかで動いている感じです。

要するに、あいりん地区全体の人口規模が大きく減っていくなかで、古くからいた住民たちが不本意な形で転居を強いられたりとか、追い出されたという実態は本当に見当たりません。長いことあいりん地区で活動していて、そんな噂も聞きません。ただ、野宿している人は 2000 年頃よりも激減したので、野宿しにくくなっているのはそうだと思います。野宿を余儀なくされた人が緊急避難で野宿するのは当然の権利でしょう。でもそれが特定の場所で常態化するのは決してよくありません。必要なのは野宿状態から脱却できるような支援、野宿より屋根のある畳の上で生活できる方が絶対にいい、ここもまちづくりでプレテはいけないところだと思います。

前述のジェントリフィケーションの段階で言うと、第 1 段階で「よりよい人」が入って来るといふことですが、労働者よりも生活保護が「よりよい人」かということ、決してそうではありません。労働者のほうがお金は持っていたし、自立心も強かった。旅行者が「よりよい人」かということ、毎日使えるお金は、バックパッカーよりも労働者のほうが持っていたかもしれません。なかなか「よりよい人」とは言いづらいところです。第 2 段階で地域社会や住民の構成が再編成されるわけですが、あいりん地区の場合は、全体の人口規模が大きく減ってその居住ストックが空くなかで、その穴を埋める形で、生活保護、外国人や日本人の旅行者が入ってきました。決して押し退けて変ったのではなくて、減って空いたところに入ったという話です。

第 3 段階で発生する地価や家賃の上昇については、不動産って、売買されなければ値段がつかないです。売れるときは、当然のことながら値段がつきますが、バブルの頃と比べるとまだ割安感があって、よほどのことがない限り、あまり売られなかった。ところが、インバウンド時代の到来で、一部のいい物件、ホテルや民泊ができるような好条件のところは、活発に売買され始めました。私が今心配しているのは、福祉マンションが民泊に変わっていく傾向です。これがどんどん進んでいくと、福祉マンションの生活保護が追い出される可能性はあって、私は危惧しています。

福祉マンションの住民は亡くなられる人も多くて、入れ替わりの激しいのが特徴です。あいりん地区内は福祉マンションのストックが多いので、他所の地域から生活保護が流入し続けなければ、なかなか維持できません。生活保護の流入が減ると、福祉マンションが民泊に転業したり、廃業した跡地が宿泊施設になるかもしれません。東京の山谷では、都内から生活保護をそこへ集める、というような福祉のまちづくりが意識されています。あいりん地区はそうではないので、福祉マンションの将来は地域にとって重要な課題です。以前の生活保護の家賃補助は一律 4 万 2,000 円だったのが、今では居住条件に応じて 3 万 8,000 円とかに減額されています。それであいりん地区の福祉マンションの経営は苦しくなっています。

ジェントリフィケーションの最後の段階、立ち退きで住居を失い、地域コミュニティも失われるという点についてはどうでしょうか。日本は借家人の権利がとても強く、大家が借家人を追い出すのが大変なことはみなさん御存じだと思います。欧米と比べると日本は転居が少ない、住宅の流動性が低いとも言われています。ニューヨークみたいに、既に人がいっぱい住んでいて、スラム化していて、インナーシティになっていて、そこにまた世界中から人が押し寄せてくる。そうになると当然、追い出されることもあるでしょうが、そもそも人口が減ってガタガタになっているところに人が入ってきて、なかなかそうならないと思います。

日本は人口減少社会へ突入したので、これから全国各地で人口が減っていきます。減ってゆく人

口を今後どう補充していくのか、これはとても重要な問題です。あいりん地区では人口規模が減りゆくなか、みんなで知恵を出し合って、誰なら来てくれるのかと考え続けた結果が、今の人口構成になっています。これからも、今いてる人たちを追い出すことなく、新しい人たちをどう呼び込むのか、常に考え続けなければなりません。私が心配しているのは、木造で老朽化した低層の住宅があいりん地区や西成区内にたくさんあることです。インバウンド時代に入って民泊が急増しているので、住宅から民泊への流れが面的に展開したら、住民が追い出される可能性はあります。

あいりん地区を見守り続けて10数年が経ちましたが、このまちが内外からの新たな滞在者や残留者を受け入れて来なければ、このまちは一体どうなっていたんだろうと思います。もしそのまま何もしていなければ、廃墟化して、クリアランスされていたことでしょう。生活保護や、外国人や日本人の旅行者を受け入れないで、誰も何の努力もせずあのまま立ち止まっていたら、もう絶対廃墟になったと思います。ジェントリフィケーションとレッテルを貼って、まちの変容を批判する人たちに聞きたいのは、「ではあの状況からあなたたちはまちをどう変えようとしてきましたか？」ということです。

批判して変化を止めようとするのはとても簡単です。でもまちは変化しなければ維持も存続も出来ないと思います。私は、まちは常に変わり続けるのが宿命だと思っています。ジェントリフィケーションだと批判する人たちには、ではこのまちをどう変えて行けばいいのか、批判するだけで終わらず具体的に生産的な提案をして欲しい、いつも思っています。ちゃんとその提案を聞いて、参考にします。ジェントリフィケーションだからセンターを建替えるとか、ジェントリフィケーションになるから壁画を描くとか、単にレッテルを貼って批判して終るだけなら、「それは話が違うだろう」というのが私の意見です。

先ほど中井先生から、日常生活の観光化が京都では問題になっている、というご指摘がありました。でもベタな観光資源の乏しい地域では、日常生活を観光資源化しなければなかなか地域の魅力は生まれません。一見何もないようなところに人を呼び込もうとするなら、日常生活をいかに観光資源化するのかを考えるべきで、私たちはそれをコミュニティ・ツーリズムと呼んで、学生たちに教えています。

日本ではまだ観光産業が全然育ってなくて、観光客が来ていることをお金に換える術を知りません。観光客が来たら、観光客でちゃんとお金を儲けてもいいんです。大阪や京都のように、住民と観光客が生活インフラを奪い合うのは、観光客がかなりの需要を持っているからで、その需要を住民サービスとうまく切り分けて、観光産業として育成したらいいんです。京都市内のバスの場合なんか、そもそも住民ニーズと観光客ニーズは全く違うわけだから。観光客ニーズに合わせて収益を上げて税収も取って、そこから住民ニーズの赤字路線の維持へお金を回せばいいんです。

だからすでに観光客が多く来ているところでは、しっかりと観光計画をつくるべきだし、これから観光客に来て欲しいところは、日常生活を観光資源化する方法を探るべきだと思います。日本全国へ観光客を、交流人口をゆきわたらそうとするならば、京都とか大阪がある程度オーバーツーリズム状態になるのは、受入れなければしょうがない。海外からいきなり四国の山奥へは誰も行けないですから。たいていは大阪経由で行くことになるので、大阪は大阪だけのことを考えてはダメです。大阪は大阪以外の観光地の魅力を宣伝してこそ、観光立国の拠点となり得ると思います。

■質疑応答

1. オーバーツーリズムの分散対策

○質問者 中国では、毎年 10 月 1 日から 7 日間、国慶節のゴールデンウィークの休日があります。四川省の重慶という都市があります。重慶は火鍋の源地で、毎年、そこへ火鍋を食べに行く観光客がたくさんいます。

今年 10 月の国慶節のときは、重慶市は市民にメールを送りました。その 7 日間は、皆さんは人気の観光地に行かないで、他から来た観光客のために提供しなさいと。7 日間が終わって、政府は「皆さんありがとう」とメールする。

そうすると、普通、観光客のオーバーツーリズムは、ほとんどゴールデンウィークとか祝日の限られた時間にだけ存在することになりますか？

○中井 分散がとても大事だと、オーバーツーリズム対策ではよく言われます。例えば京都の場合、京都の地元の人に向けてはあまりないのですが、観光客の方に向けて、例えばこの時間は混んでいるから、空いている時間にもっと来てくださいとリアルタイムで情報を発信するなどの取り組みが進められています。

また例えば、どこの観光地でもどうしてもお昼の時間が混むので、「朝のお寺も素敵です」と朝の魅力をアピールすることで、時間ごとの混雑を平準化するような試みも一生懸命やっているところですよ。

ただ、その結果、それまでは余り観光客が来なかった、受入れ態勢が整ってないところにも観光客が来てしまうという問題もあり、なかなか幅広く受入れ態勢を調べていくことにも課題はあるようです。

○松村 一時的で瞬間最大風速的な宿泊需要に対しては、宿泊施設の広域連携が最も確かな対策だと思います。特に関西圏は広いようで狭いからです。オーバーツーリズムで一番困るのは避暑地みたいなところ、例えばトルコのアンタルヤというまちは、普段 10 万ほどの人口が夏場だけ 200 万くらいになるんです。夏場のリゾート地でロシア人とかが押し寄せてきて、まちなかがゴミだらけになって、都市機能が麻痺するんです。他にも、1980 年代の雲南省シーサンパンナ。当時はホテルが少ないのに、水掛祭りのシーズンに観光客が押し寄せ、路上に簡易ベッドが並びそこで寝る状態でした。明らかなオーバーツーリズムです。

北京などでやっている、観光地の混み具合を電光掲示板で知らせるのはいいですね。駐車場案内なんかでもあるでしょう。京都も今そのソフトを開発しにかかっています。

2. ジェントリフィケーションをめぐる現象・理論・批判の内実

○質問者 私は、リチャード・フロリダのクリエイティブ・クラスの都市経済論からジェントリフィケーションという理論を知って、今日のセミナーに参加させていただきました。そこでの議論では、ジェントリフィケーションは結構ポジティブに捉えられていたのですが、今日の講演の最後で、ジェントリフィケーション論は追い出し政策みたいな印象を受けたんです。

大多数のジェントリフィケーション論者、あるいは国内のクリエイティブ・クラスの都市経済論を知っている人たちは、何をやっているのかをお聞きしたいです。

○松村 ジェントリフィケーションの議論って、私が大学院生の頃からありました。1980年代、90年代の頃は、あなたがおっしゃるみたいに、とてもポジティブに捉えられていました。クリエイティブ・シティの文脈では、当然のことながらジェントリフィケーションはまちを活性化する現象と捉えていますよね。でも、ジェントリフィケーションの「追い出し」「排除」という論点に注目して、ジェントリフィケーション批判する人もいます。ジェントリフィケーションが起これば、まちは良くなるはず、でも良くなるなかで「追い出し」や「排除」はあってはいけない、ということだと思います。まちづくりの現場を知っている人は、クリエイティビティがまちの活性化に欠かせないことはよく分かっている。

3. 行政間格差とその越境の可能性

○質問者 3月まで京都外大に所属して、京都に4年間住んで、すごく住みにくいまちだと個人的には思ったんですけど、西宮に来て、すごく住みやすいまちだと思いながら過ごしています。今も京都の亀岡市で、副市長さんたちとまちづくりの仕事をさせていただいています。

亀岡市だと、1日の観光客の落とすお金は大体1,680円ぐらいで、京都は2万円ぐらいあります。すごく差がある。それでも亀岡市は京都の中で9位、9番目にお金をもらっている都市だと言われているんです。京都市に集まって、それ以外に分散していないのが、すごく課題だと個人的には感じています。

そこの行政の取り組みとか、実際どのようにされているのでしょうか。それとも、仲違いと言ったらいいのか、壁があるような形なのがよく気になって、質問させていただきました。

○中井 京都市とそれ以外の地区の格差の問題はずっと言われていることで、いわゆる観光消費額を考えると、結局一番大きいのは宿泊になるんです。どこのまちに泊まってもらうかということで、広がりやぐんと変わります。

例えば、京都市は「とっておきの京都」という、いわゆる京都市以外の観光地に回ってもらおうというキャンペーンを、去年ぐらいからやってはいるんですけども、どうしても泊まるなら京都市内、宿泊施設にしても京都市に集中している。

宿泊施設は資本も必要な商売ですから、例えば大きな宿泊施設を小さなまちに、いきなり造るのはなかなか難しい。もう少し整備され、追いついてくるまでは、この格差は続くんじゃないかなという気がしています。

○松村 京都市と京都府があって、大阪も大阪市と大阪府があって、京都市の観光政策は、金持ちでマナーのいい観光客だけに来て欲しいって感じですね。でも外国人観光客は自治体の境界線なんかどうでもいいんです。西宮市が兵庫県なのか大阪府なのか、そんなのどうでもいい。外国人観光客目線はその辺りの感覚を変えてくれるんです。行政側にとって境界線はとても大きな問題でお互い張り合うわけですが、観光客側にとってはどうでもいい話。そういう意味で、観光には分断されてきた地域を統合する力があるんです。それを私たちは利用して、観光では地域を横断する広域行政を作っていかなければならないんです。